

北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽

この町のストーリーの中心は小樽市民です。この町が小さな漁村から主要な貿易拠点へと変遷した際に中心にいた小樽市民が、現在では遺産保護の国家的リーダーです。19 世紀にニシンにより財を成すために北の前哨基地に移住してきた漁師をはじめとして、小樽は開拓者精神により突き動かされてきました。

19 世紀の終わりになると、明治政府（1868 年–1912 年）が資源の豊富な北の島である北海道への開拓・移住を決め、小樽は新天地の中心となりました。1882 年には、内陸の釧山から小樽港に石炭を輸送するために北海道初の鉄道が開業し、石炭は政府による工業化の原動力となりました。増加を続ける貿易商や商人、海運会社に対応するため、日本の大手銀行がこの町に支店を設立しました。1920 年代まで小樽は北海道の金融の中心でした。

1960 年代になると国のエネルギーの主流が石炭から石油へと変わり、その結果小樽の経済力は徐々に衰退し、小樽は石炭の出荷港としての地位を失いました。その頃には使われなくなった小樽運河を埋め立てて倉庫を取り壊し、新しい道路を作る計画が持ち上がりました。すると、小樽運河を守ろうという草の根運動が市民の間で沸き起こり、数年に及ぶ話し合いの末、この町の当局が当初の計画を修正しました。

1980 年代に小樽運河の一部を埋め立て、小樽運河の残った部分に沿って遊歩道を建設しました。小樽は歴史的建造物を別の用途に使いながらも遺産の保護に成功した町として、新たなアイデンティティを得ました。この市民主導の動きが日本各地の町に影響を及ぼし、どのように成長と保護のバランスを取るかについて考えさせるようになりました。